

# 「しぐさ」の史的考察：中世の ツマハジキ・弾指 について

著者名(日)	吉田 光浩
雑誌名	大妻女子大学紀要．文系
巻	47
ページ	186-181
発行年	2015-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006022/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006022/</a>



## 「しぐさ」の史的考察 — 中世の〈ツマハジキ・弾指〉について —

吉 田 光 浩

【キーワード】 中世語 非言語行動 非言語コミュニケーション しぐさ コミュニケーション史 語彙

### はじめに

非言語行動史の分野については未だ解明されていない領域が多く残されている。そのような領域に取り組む研究の一環として、拙稿(2014)「「しぐさ」の史的考察 — 古代文献に見える〈ツマハジキ・弾指〉について —」(『コミュニケーション文化論集』12号)では、古代の資料に見える指をはじいて音を立てる行為の表現性について検討を試みた。この行為を表す語には、和語に「ツマハジキ」、漢語に「弾指(タンジまたはダンシ・ダンジ)」が見られるが、このふたつの語については、易林本『節用集』の「弾指」に「タンジ」と「ツマハジキ」を宛てる項目がそれぞれあり、『和漢通用集』には「弾指たんじつまはじき也」とする記述が見られる。また、本稿後掲の例(6)(7)において、『今昔物語集』では漢語「弾指」、『沙石集』では「爪ハジキ」が用いられているが、両例の間に非言語行動としての相違は特に認められない。したがって、「ツマハジキ」と「弾指」については、しぐさとその表現性の面に着目する限り、とりたてて両者を区別する意識は見られなかったようである<sup>①</sup>。以上のような経緯から、本稿では、前稿に続き〈ツマハジキ〉と〈弾指〉を同一範疇の身体表現〈ツマハジキ・弾指〉と捉えて、前稿に続き中世のこの非言語行動の表現性について素描しておくことにする。

なお、調査の対象は、国文学研究資料館の大系本文(日本古典文学大系)データベースおよび本稿末記載の使用文献に挙げた資料であるが、表記については適宜改めたところがある。

### 一

中世の〈ツマハジキ・弾指〉については、『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂)において、次のように記述されている。

つまはじき [爪弾]

人さし指、または中指の指先を、親指の腹にあててはじくこと。多く、まじないとか、対象を嫌悪し排斥する気持を表わすとかの動作とする。(用例略)

たんじ [弾指]

① 物を爪先ではじくこと。相手を軽蔑して、退けようとする動作にいう。

② つまはじきするほどの、ごくわずかな時間であることをいう。

上記の記述にみえる動作自体は、前稿で検討した『角川古語大辞典』の記述に大きく異なるもので

はないが、実際に古代の用例を検討してみると、その表現性については、相手（対象）を軽蔑して退けようとする場面での例はあまり見当たらず、むしろ主体自身の〈悔しさ〉〈後悔〉〈不満〉〈腹立たしさ〉〈嘆き〉など不快な感情を表現する例が顕著であり、ここにみられる記述とずいぶん違いがみられるようである。したがって、中世の〈ツマハジキ・弾指〉について検討を進める前に、前稿で考察を試みた古代の場合について、ここでひとまず整理しておくことにする。

古代の〈つまはじき・弾指〉についてしぐさの表現性の面から整理すると、少なくとも次のような4種の多様性が認められる。

i 主体の不快な感情。

（例） いらへわづらひて、はてはものもいはねば、「あなかしこ、御気色もあしうはべめり、さらばいまは仰せごとなからんには、聞こえさせじ。いとかしこし」とて、つまはじきうちして、ものも言はで、しばしありて立ちぬ。（かげろふ日記）

ii 対象に対する〈非難〉。

（例） 今朝権大納言（藤原頼通）・権中納言・三位中将・源宰相同車、被迎門外、被召乗車、於五条辺騎馬、見古加（久我）云処、彼大納言所領也、其辺有能通朝臣領処、大納言有要望気者、可弾指之世也（小右記 長和三年十二月六日条）

iii 呪術的な作法。

（例） 一の車のとこしほりを、ふつふつと切りてければ、大路なかに、はくと引き落としつ。下臈の物見むとわななき騒ぎ笑ふこと限りなし。車の男ども、足をそらにて、惑ひ倒れて、えふともかかげず。「出でたまふまじきにやありけむ」「かくいみじき恥の限りを見ること」と、つまはじきをしつつ惑ふ。（『落窪物語』巻之二）

iv 人に自己の説明を説き聞かせる際の注目要求。

（例） 徳町、帰り来て、「など、もの思したるやうなる」。いらへ、「くちおしう、ものの費えあることを数ふれば、多くの損なり。くやくしく、人のことを聞きて、わが世に知らぬことを聞くこと」とのたまふ。徳町、いとほしきことかぎりなし。おとど「男ども、酒買ひて、肴請ふぞや。かけて聞けば、心地こそ惑へ」市女、うち笑ひて、つまはじきをしてきこゆ。「かくばかりのことをやは、心地惑はしては思しつる。いやしき身にだに、さばかりのことは思ひ給へぬものを」とて、納め殿開けて、よきくだ物・<sup>からもの</sup>干物あげていだす。おとど、ものもおぼえ給はず。（うつほ物語 藤原の君）

これらのうち、古代においてこの動作は、iの主体の不快な感情を表す場面で現れる場合が多く、その感情も〈悔しさ〉〈後悔〉〈不満〉〈腹立たしさ〉〈嘆き〉を表す例が見られ、不快な感情を多岐にわたって表現している。また、iiは、世相を慨嘆あるいは非難すべきものとして批評する際の評語として古記録等の資料に見出すことができる。iは主体自身の感情を表すものであるが、iiは非難あるいは批判すべき「対象」に対する評語として用いられるものであり、その意味でiは主体を指向する表現であり、iiは対象を指向する表現である点において異なるものである。古代の場合は、これらのiとiiのいずれかの表現性をもつ例が多いといえる。一方、明らかにiiiに該当すると判断される例は比較的少なく<sup>(2)</sup>、ivについては、管見の限りにおいて、古代の例は上記の『うつほ物語』の1例のみである。

しかし、このような状況は、中世に入ると大きく変化していったようである。

## 二 中世のツマハジキ・弾指

### 二・一 感情表現および非難の表現に伴うツマハジキ・弾指について

〈つまはじき・弾指〉の非言語行動は、古代において〈悔しさ〉〈不満〉〈腹立たしさ〉〈後悔〉〈嘆き〉など、多様に不快な感情を表す場面で用いられてきたが、中世になるとその多様性は失われ<sup>(3)</sup>、逆に以下の例のような、古代にはあまり見受けられなかった〈軽蔑〉を表す例が目立つようになっていったようである。

(1) 国々ノ大名小名並居タリ。其中ニ京ノ者モアリ、平家ノ家人タリシ者モアリ。皆爪ハジキヲシテ申シケルハ、「サレバ居直畏タラバ命ノ生給ハンズルカヤ。西国ニテ何ニモ給ベキ人ノ、是マデサマヨイ給コソ理リナリケレ」トゾロ々ニ申シケル。(延慶本平家物語 第六本)

(2) 年来の主を敵に討たせて、欲心に義を忘れたる五大院右衛門が心の程、稀有なり、不道なりと見る人ごとに爪弾きをして憎みしかば、(土井本太平記 卷十一)

(1)は源平合戦の敗軍の将、平宗盛が頼朝の面前に引き出され、比企能員から伝えられる頼朝の言葉を畏まって聞く場面である。宗盛の卑屈な姿に接した人々は嘲り、軽蔑を表す「弾指」のしぐさを投げつけている。また、(2)は旧主北条高時の遺児邦時を敵方に差し出した五大院宗繁の裏切りを人々がつまはじきして憎悪する場面である。いずれも臆病または卑怯な言動等に対する不快感が含まれており、対象に対する蔑みの感情、すなわち〈軽蔑〉の意が込められている例である。ここに挙げた例はいずれも波線部に見えるように〈非難〉の言動を伴っている。つまり、感情面では〈軽蔑〉が、また言動としては対象に対する〈非難〉が現れている例である。このような主体自身の感情とともに対象に対する〈非難〉を表す例は、古代にも見られたが<sup>(4)</sup>、その場合の感情は〈不満〉や〈いらだち〉〈腹立たしさ〉の例であった。しかし、中世に入ると上記のように主体自身の〈軽蔑〉の感情を表す場面で対象に対する〈非難〉も表す例が顕著になってくるようである。

このような〈非難〉を表す〈つまはじき・弾指〉は、前稿においてすでに指摘したように、古代の公家の日記や史書など漢文系の文献に人の行動や世相に対する〈非難〉を表す評語として「可彈指」などの表現で用いられてきたが、同様の状況は、以下の例のように中世においても引き続き認められる。

(3) 廿九日、丁未、晦、天晴、官軍入南京、燒堂塔僧坊等云々、東大興福兩寺已化煙云々、可彈指云々、(明月記 治承四年十二月廿九日条)

(4) 比企旃四郎奉レ仰相ニ具之。行ニ向政所橋邊。剥ニ取袈裟被レ燒レ之。見者如レ堵。皆莫レ不ニ彈指。 (吾妻鏡 正治二年五月十二日条)

(5) 而今以喝食入室、首尾不相応事也、所詮如巷説者、寺門衆徒訴訟、新院御結構造作之事也云々、謀略之至、可彈指々々、莫言々々、(後愚昧記 応安六年十一月廿四日条)

上記のような〈非難〉を表す例は、一定の状況や何らかの対象に対する批判的評語として用いられているが、これらには対象に対する〈非難〉に留まらず、憤りや蔑みのような主体自身の感情も伴いやすい傾向がある。中世にみられる上記のような〈軽蔑〉の感情を表す例は、ここに挙げたような対象に対する〈非難〉を表す例から派生したものではなかろうか。

結果として、中世の〈つまはじき・弾指〉は、古代にみられた主体自身の様々に不快な感情を表現する多様性が失われ、対象に向かって〈軽蔑〉の感情を伴いながら〈非難〉する場面で用いられる例が顕在化するようになっていったものと考えられる。

## 二・二 呪術的な作法および説法の場面で用いられるツマハジキ・弾指について

中古では上述の『うつほ物語』の例のように、人に自分の説明を説き聞かせる際に〈ツマハジキ・弾指〉の行動をとるものがみられたが、そのような例はわずかであった。しかしながら、中古の末から中世にかけてそのような例は比較的多く見受けられるようになる。とりわけ説話集には、神仏あるいはその化身が説法を施す際の作法としてこの動作をとる例が見受けられる。

- (6) 今昔、但馬前司(二字分欠字)國舉<sup>クニタカ</sup>ト云フ人有<sup>ケリ</sup>。年来、公<sup>ケニ</sup>仕<sup>ハ</sup>私<sup>ヲ</sup>顧<sup>テ</sup>有<sup>ル</sup>間、身<sup>ニ</sup>受<sup>テ</sup>病<sup>ヲ</sup>俄<sup>ニ</sup>死<sup>ヌ</sup>。～(中略)～傍<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>人<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>「此<sup>ノ</sup>小<sup>サキ</sup>僧<sup>ハ</sup>此<sup>レ</sup>、地蔵<sup>ボサツ</sup>井<sup>ニ</sup>在<sup>マ</sup>ス」ト。國舉<sup>クニタカ</sup>此<sup>レ</sup>聞<sup>テ</sup>、此<sup>ノ</sup>小<sup>サキ</sup>僧<sup>ニ</sup>向<sup>テ</sup>地<sup>ニ</sup>跪<sup>ヒ</sup>涙<sup>ハ</sup>流<sup>シ</sup>テ申<sup>テ</sup>申<sup>ク</sup>、「我<sup>レ</sup>、不<sup>レ</sup>慮<sup>サル</sup>外<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>召<sup>タリ</sup>。願<sup>ハ</sup>、地蔵、大悲<sup>ヲ</sup>誓<sup>フ</sup>以<sup>テ</sup>、我<sup>ヲ</sup>助<sup>ケ</sup>テ免<sup>ス</sup>謀<sup>ヲ</sup>廻<sup>シ</sup>給<sup>ヘ</sup>」ト。如此<sup>ク</sup>頻<sup>ニ</sup>申<sup>ス</sup>ト云<sup>ヘドモ</sup>、小<sup>サキ</sup>僧<sup>ハ</sup>答<sup>ヘ</sup>給<sup>フ</sup>事<sup>无<sup>シ</sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>彈<sup>ミ</sup>指<sup>シ</sup>テ宣<sup>ハク</sup>、「人<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>榮<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>只<sup>ハ</sup>一<sup>ツ</sup>旦<sup>ニ</sup>夢<sup>ノ</sup>幻<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>、罪<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>因<sup>ノ</sup>縁<sup>ハ</sup>宛<sup>モ</sup>万<sup>ノ</sup>劫<sup>ヲ</sup>重<sup>タル</sup>嚴<sup>ニ</sup>似<sup>タリ</sup>。況<sup>ヤ</sup>、汝<sup>ヰ</sup>、常<sup>ニ</sup>女<sup>ニ</sup>耽<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>罪<sup>ノ</sup>根<sup>ヲ</sup>殖<sup>タリ</sup>。今<sup>ニ</sup>、其<sup>ノ</sup>罪<sup>有<sup>テ</sup>既<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>召<sup>タリ</sup>。我<sup>レ</sup>、何<sup>カ</sup>、汝<sup>ヲ</sup>助<sup>ケム</sup>」</sup>

(今昔物語集 但馬前司(二字分欠字)國舉、依地藏助得活語 第卅一)

- (7) 母ヤハラゲテ「病人ハ神田返シ参ラセント申候。今度ノ命バカリ助サセ給ヘ」ト申セバ、  
<sup>カンナ ウチウラヒ</sup>巫ギ打<sup>キ</sup> 咲<sup>テ</sup>、「首ヲネジテ、<sup>ナンデフカミ</sup>「何条紳」トイフ者ヲヤ。アラキタナノ心ヤ。我ハ十一面ノ化  
<sup>ヲボヘ</sup>身ナリ。本師阿弥陀ノ本願ヲ頼ミ、真ノ心アリテ念仏ヲモ申サバ、イカニイトホシクモ覺、  
<sup>タツ</sup>貴カラン。是程ニキタナク濁リマサナキ心ニテハ、争カ本願ニ相応スベキ」トテ、ハシ〜  
<sup>イカデ</sup>ト爪ハジキヲシテ、ハラ〜ト泣キ給ケレバ、是ヲ聞ク人、皆涙ヲ流シケリ。」

(沙石集 卷第一)

『今昔物語集』の例(6)では漢語「弾指」が用いられ、『沙石集』の例(7)では和語「爪ハジキ」が用いられているが、場面の類似性を考えると両者を区別してとらえることは適切ではない。このふたつはいずれも神仏が人間に法を説く際に行った相似の非言語行動として捉えることができるものであり、そこには呪術的な意図も含まれているものと考えられる。また、(6)の「弾指」については、大系本頭注に「つまはじきのことで、茲では、とりあわぬ状を指す」とある。相手の言い分を排斥する気持ちが表れたものとする見方であろう。しかし「とりあわぬ状」という理解では、「自ラ」と語られている意図について論理的に十分な説明ができない。ここは小さな僧の姿をした地藏菩薩自身が自ら相手に言い聞かせる説法を行った動作として捉えると、「自ラ弾指シテ」と記された意味が理解できる。『沙石集』の例の場合は「ハラ〜ト泣キ給ケレバ」とあり、これも非難や排斥、あるいはとりあわない様を表すものではない。「是程ニキタナク濁リマサナキ心ニテハ、争カ本願に相応スベキ」とあるように、救いたくとも救いようのない地頭の「マサナキ心」に対して流す涙であり、それゆえにその話を聞いた人々は皆涙を流したものと考えられるのである。したがって、古代にみられた〈後悔〉〈悔しさ〉〈腹立たしさ〉〈不満〉等、主体の感情を表す動作や対象に対する〈非難〉としての〈ツマハジキ・弾指〉とはおのずから異なるものと考えられる。さらに、次の例についてもこれらと同様の説明が可能であろう。

- (8) 「二歳と申しけるに、父におくれぬ。ただひとりたのみて侍りつる母に此曉又おくれ侍ぬ。いまはたれをたのみて身をたて、いづれの世にか、ふたたびあひみ侍る事をえん」といひければ、上人聞きて、「な泣きそ」とこしらへて、弾指してのたまひける、

朝夕歎心忘後前立常習

<sup>となへ</sup>と唱て過給にけり。<sup>もん</sup>小兒この文を聞きて、<sup>すなわちなき</sup>則泣やみにけり。

(古今著聞集 卷第十三 哀傷第廿一 空也上人詠歌して孤児を慰むる事)

空也上人が両親を亡くした小児(実は仏の化身)を慰める場面である。『な泣きそ』とこしらへて

とあるように、高僧が詠歌で子どもをなだめる場面で行われる「弾指」は、上記の二例と同様に法を説く際の動作として捉えられるものであり、そこには同時に呪術的な作法としての意図も働いているものと考えられる。

上記の例では、いずれも神仏の化身や高僧が法を説き聞かせる場面で〈ツマハジキ・弾指〉が行われているが、次の諸例をみると、説き聞かせる主体は俗世の者の場合もあり、また説き聞かせる内容は必ずしも宗教的な説法ではない。したがって、以下の例の場合、呪術的な作法としての意図は具体的に含まれておらず、その作法の模倣として行われた動作の可能性が高いものと思われる。

- (9) 青砥左衛門眉をひそめて「さればこそ御辺達は愚かにて、世の費えをも知らず、民を恵む心無き人なり。銭十文はただ今求めずは、滑川の底に沈みて永く失せぬべし。それがしが松明を買はせつる五十文の銭は、商人の家に留まりて永く失すべからず、我が損は商人の利なり。彼と我と何の差別かある。かれこれ六十文の銭一つをも失はず、あに天下の利にあらずや」と爪弾きをして申しければ、難じて笑ひつるかたへの人々、舌を振りてぞ感じける。

(土井本太平記 卷三十五)

- (10) か程に安き世を取り得ず、三十余年まで南山の谷の底に埋れ木の花咲く春を知らぬやうにておはするを以つて、官方の政道をば思ひ遣らせ給へ」と爪弾きをしてぞ語りける。兩人の物語げにもと聞き据ゑて耳を澄ますところに、

(同 卷三十五)

- (11) 道誉、その翌日この願書を伊勢入道が許へ持ちて行きて、「これ見給へ。相模守が隠謀の企てあつて、志一上人に付いて、將軍を呪詛し奉りけるぞや。自筆自判の願書、分明に候ふ上は、疑ふところにて候はず。急ぎこれを持参して、密かに將軍に見せ参らせられ候へ」とて、爪弾きをして懷よりぞ取り出だしける。

(同 卷三十六)

いずれも『太平記』に見える例であるが、このうち前二例(9)(10)では話し手が聞き手に言い聞かせるように自説を語る場面で用いられており、それに耳を傾けた人々は「舌を振りてぞ感じける」「げにもと聞き据ゑて耳を澄ます」のように、その説に納得し、共感を示している。また、(11)については、相模守清氏が將軍義詮を呪詛しているとする訴えを、政所奉行伊勢入道貞継に佐々木道誉(高氏)が告げる場面である。この場面のツマハジキについては新潮日本古典集成本頭注に「不快そうに」と説明するが、ここはツマハジキをしながら証拠の願書を取り出して自説を政所奉行に訴えているところである。佐々木道誉は僧籍にあるが、この場合に説き聞かせている説明は、呪術的な作法が必要なものではなく、きわめて政略的な内容のものである。したがって、いずれの例も同様に人に自説を説き聞かせるためのいわば注目要求のための身体表現の例として捉えることが可能であろう。ただし、〈ツマハジキ・弾指〉が、上記の神仏や高僧によって説法の際に用いられたしぐさであったことを考えると、注目要求の〈ツマハジキ・弾指〉は、もとは仏教に由来する呪術的な作法から派生したものと考えられる。古代の『うつほ物語』において、すでに俗世の女性(徳町)が夫に対してツマハジキをしながら説き聞かせる例がみられることを考慮すると、そのような派生は、すでに中古の時代に民衆の中にもすでに広くみられ、中世も引き続き行われていたものと考えられる。

## おわりに

ここでは、中世の〈ツマハジキ・弾指〉のしぐさの表現性について、前稿で述べた事柄と比較するかたちでまとめておきたい。

- i 古代には、主体自身の様々に不快な感情を表す表現として〈ツマハジキ・弾指〉のしぐさが



行われていたが、中世にはその多様性が見られなくなり、代わってそれまでにはほとんど見られなかった〈軽蔑〉を表すものが多くみられるようになった。また、対象に対する〈非難〉を表す例は古代に引き続き用いられている。これは、〈ツマハジキ・弾指〉のしぐさが、より強く対象を指向するようになり、主体自身の感情を表すことよりも対象に向かって〈非難〉したり〈軽蔑〉したりする場合に用いられるようになったためと考えられる。

- ii 人に自説を説く際の注目要求の表現としての例は、古代にもわずかに見られたが、中世には、そのような例が一層の広がりを見せている。説話集などに神仏や高僧が説法の際の呪術的な作法として行っている例が見られるところから、しぐさ自体は仏教由来のものと考えられるが、古代に俗世の女性が夫に対してこのしぐさをとる例が見られるところから、注目要求のしぐさとしても、中世以前から広く行われていたものと考えられる。

#### 注

- (1) もちろん、和語ツマハジキは物語など和文系の資料を中心に、漢語「弾指」は主に漢文系の資料に用いられる傾向があり、資料上の差異は認められる。また、「弾指」には、「然者、万曲に通じて、一風・一音・一弾指の機にあたるも、序破急成就也」(拾玉得花)のような〈一瞬の時間〉を表す場合、ツマハジキには昆虫のコメツキムシの異称として用いられる場合も見られる。
- (2) 本稿で対象とした使用テキスト以外に、さらに仏教系の資料を博搜すれば、iiiに該当する例も殖えるものと予想される。
- (3) もちろん、「百川 巫の教へにしたがひて、この泰隆に会はず。泰隆つまはじきをして帰りにき」(水鏡 第五十代光仁天皇)の例に見るように主体の不快な感情を表す例が全く見られなくなるわけではないが、中世では主体よりも対象を指向する非難や軽蔑を表す例が多くなっていったようである。
- (4) 拙稿(2014)「「しぐさ」の史的考察——古代文献に見える〈ツマハジキ・弾指〉について——」pp. 126-129「二・二 主体の感情表現と非難の表現のはざま」参照。

#### 使用テキスト

大日本古記録『小右記』(岩波書店・1964)・国史大系『吾妻鏡』(吉川弘文館・1964)・『明月記』(国書刊行会・1969)・大日本古記録『後愚昧記』(岩波書店・1984)・新編日本古典文学全集『うつほ物語』(小学館・1999)・新編日本古典文学全集『落窪物語』(小学館・2000)・北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』(勉誠社・1990)・西端幸雄・志甫由紀恵編『土井本太平記』(勉誠社・1997)・榊原邦彦編『水鏡本文及び総索引』(笠間書院・1990)

※上記以外については、国文学研究資料館の大系本文(日本古典文学大系)データベースにより検索し、用例は日本古典文学大系(岩波書店)の原本から採集した。但し、表記については適宜改めたところがある。

#### 参考文献

室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典室町時代編』(三省堂・2000)  
清水教子『平安後期公卿日記の日本語学的研究』(翰林書房・2005)  
糸井通浩・神尾暢子編『王朝物語のしぐさとことば』(清文堂・2008)  
拙稿「「しぐさ」の史的考察——古代文献に見える〈ツマハジキ・弾指〉について——」(『コミュニケーション文化論集』12号・2014)